

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(お茶の水女子大附属・改)

修行者法師、二人道^{ににん}に行き連れ、相語^{*1}らひて、修行しけるに、ある里に泊まりて、一人の修行者、夜更^{よふ}けて、秘^{ひそ}かに家主^{いへぬじ}に言ひけるは、「これに候^{きこ}ふ法師は、由緒^{*2}ありて、召し使ふべきもので候へども、時に、売り候ふべし。いくいくらに買はせ給^{たま}ふべし」と約束して、すでに値^{あひ}を定めつ。この一人の法師、このことを、壁を隔^へて聞^ききけり。「不思議^{*3}のことなり。我を、この法師、売ることよ」と思^{おも}ひて、暁^{あけ}、この法師が寝入りたるひまをうかがひて、内^いに入りて、「夕べ申し候ひし値、賜^{*4}り候はん。忙^{*5}しく候ふ。この法師はこれに寝て候ふなり」とて、値^ちを取りてつい出^いでて去りぬ。この法師、目覚めて見れば、一人の法師なし。さて、支度^{*6}相違^{*7}して、かへりて売られて責め使はれけり。

由^{よし}なく人を誑惑^{*7}せんとして、我が身を煩^{わづ}はす。因果の道理^{たが}違はずこそ。古人^{こじん}いはく、「人をそしりては、己が失を思ひ、人を危ぶめては、己が落ちんことを思へ」と言へり。実^{じつ}なるをや。

10

(無住『沙石集』)

- *1 相語らひて＝親しくなつて。
- *2 由緒ありて＝事情があつて。
- *3 不思議のことなり＝とんでもないことだ。
- *4 ひまをうかがひて＝隙を見はからつて。
- *5 ついでに去りぬ＝さつさと立ち去つて行つた。
- *6 支度相違して＝思惑がはずれて。
- *7 誑惑せんとして＝たぶらかそうとして。

問一 線ア・イを、現代仮名遣いのひらがなで書きなさい。

ア

イ

問二 線a・dのうち、他と動作の主体が違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 線①「夕べ申し候ひし値、賜り候はん」の現代語訳として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 昨夜申しました代金をちようだいしましょう

イ 昨夜おっしゃった代金をお支払いください

ウ 昨夜申し上げた代金をお支払いしましょう

エ 昨夜おっしゃった代金をいただきますはしません

問四 線②「実なるをや」に込められた筆者の思いとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 人に悪いことをすると自分が苦しむことになるというのは、本当にその通りであることだなあ。

イ よくないことをして手に入れた金銭が身につかないというのは、全く確かなことだなあ。

ウ 人によくないことをすると自分に災いがやってくるというのは、本当のことだとは思えないなあ。

エ あまりに欲深いとしつぺ返しをくらってしまふというのは、事実に基づいた教訓なのだなあ。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

鎌倉の金沢といふ所に、流田坊と申して、世を遁れたる出家あり。今は仏の道もふかく願はず、明暮、丹後節の道行ばかりを語りて、柴の網戸を引き立て、軒の松が枝に、蔦の葉のかかりて、紅葉するを見て、秋をしる。浪の月心をすまし、雁のわたるを琴に聞きなし、只夢のやうに日を送りぬ。たくはへる物もなければ、露時雨の折ふしは、煙を立つる爪木もなし。

万その通りにして、死次第と、身を極めたまふ折から、入江にさざ浪たつて、見なれぬいきもの二疋、人におそれず近寄るを、よくよく見れば、鱧鮎といふものなり。一疋は、流れ木をひろひ集めて抱へ、また一疋は、ほし肴を持ちて、物いはぬばかり、人間のごとく頭をさげて居る。この心ざし嬉しく、精進をやぶりて、これをくひける。その後は手馴れて、淋しきとおもふ時には、かならず来て、よき友となりぬ。ことにたのしみは、身のうちのかゆさ、云はねど自然としりて、思ふ所へ手をさしのべ、そのころよき事、命も長かるべし。今世上にいふ、孫の手とはこれなるべし。

(井原西鶴『西鶴諸国ばなし』)

- *1世を遁れたる出家＝遁世者。
- *2丹後節＝江戸浄瑠璃を代表する杉山丹後の語った浄瑠璃節。
- *3道行＝語り物で、旅していく沿道の光景や感想などを述べたもの。
- *4浪の月心をすまし＝波に照る月の姿を見て心を澄まし。
- *5露時雨＝露がいつぱいに下りて時雨が降ったようになること。
- *6煙を立つる爪木＝食事を整えるための薪。
- *7精進＝肉食を断って菜食すること。

問一 ―― 線 a～d の「の」のうち、他と意味・用法が違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問二 ―― 線①「流田坊」の生活ぶりはどのようなものでしたか。あてはまるものを次のうちからすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 出家した僧侶として、日々厳しい修行に明け暮れていた。
- イ 毎日毎日、丹後節の道行ばかりを語っていた。
- ウ 部屋にこもっていて、季節が変わるのも全く気づかなかった。
- エ 琴を聴きながら雁を眺めるような風流な生活を夢見ていた。
- オ 露時雨のときは、食事の支度をするのも大変だった。

問三 ―― 線②「精進をやぶりて、これをくひける」とありますが、その理由を現代語で簡潔に書きなさい。

問四 ―― 線③「よき友となりぬ」とありますが、そのような付き合いが生じたなかで、流田坊は鱧鮎のどんなことが特にたのしみだったのですか。現代語で三十字以内で書きなさい。

問五 鱧鮎が流田坊の前に初めて現れたのは、流田坊がどんな心境でいたときですか。文中から探し、その初めと終わりの四字を書き抜きなさい。

練習問題

1 次の漢詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

*1さんきょうめい
山居秋暝 王維

空山新雨後

天氣晚來秋

明月松間照

清泉石上流

竹喧歸浣女

蓮動下漁舟

隨意春芳歇

王孫自可留

*2
空山新雨の後

*3
天氣晚來秋なり

明月松間に照り

清泉石上に流る

*5
竹喧しくして浣女帰り

運動いて漁舟下る

*6
随意なり春芳の歇むこと

*8
王孫自ら留まるべし

*1 山居秋暝 山荘における秋の夕暮れ。

*2 新雨 雨あがり。 *3 天氣 澄んだ気象。 *4 晚來 暮れ方。

*5 竹喧しくして浣女帰り 竹林の向こうににぎやかな話し声がして、

川で洗濯していた娘たちが帰っていき。

*6 随意 自由に。ご勝手に。

*7 春芳の歇むこと 春の花が散ること。

*8 王孫自ら留まるべし 若様は、春の花が散ろうと、そんなことに

はお構いなしにここに留まるだろう。

問一 この漢詩の種類を漢字四字で書きなさい。

問二 この漢詩で押韻になっている漢字を順に書き抜きなさい。

問三 この漢詩では、対句になっている行が二組あります。それぞれ漢

数字で答えなさい。

問四

線①「王孫自可留」に、返り点を付けなさい。

王孫自可留

問五

線②「随意なり春芳の歇むこと」が表していることとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 作者のいる山荘の秋の風情のすばらしさ。

イ 山荘を取り巻く秋の景色の物悲しさ。

ウ 作者のいる山荘に春の草花がない寂しさ。

エ 山荘を取り巻く四季の自然の豊かさ。

問六 この漢詩に描かれている情景として最も適当なものを次のうちから

選び、記号で答えなさい。

ア 雨あがりの夕暮れの気配を味わおうと自然と人が集う秋の情景。

イ 雨があがって澄んだ気配を増していく、山荘を取り巻く秋の夕

暮れの情景。

ウ 雨があがって月が顔を出し、華やかさに彩りを加えていく秋の

夕暮れの情景。

エ 雨あがりの夕暮れ、人の気配も絶えたなかで、松の葉

越しの月光が美しくきらめいている情景。

2 次の漢文および書き下し文を読んで、あとの問いに答えなさい。

孟孫獵得麇。使秦西巴載之持歸其母。隨之而啼。秦西巴不忍而與之。孟孫歸至而求麇。答曰、「余不忍而與其母。」孟孫大怒逐之。

居三月、復召以爲其子傅。其御曰、「曩將罪之、今召以爲二子傅、何也。」孟孫曰、「夫不忍麇、又且忍吾子乎。」

孟孫獵して麇を得たり。秦西巴をして之を載せて持ち帰らしむ。其の母之に隨ひて啼く。秦西巴忍びずして之に与ふ。孟孫歸り至りて麇を求む。答へて曰はく、「余忍びずして其の母に与ふ。」と。孟孫大いに怒りて之を逐ふ。

居ること三月、復た召して以て其の子の傅と爲す。其の御曰はく、「曩には將に之を罪せんとし、今は召して以て子の傅と爲すは、何ぞや。」と。孟孫曰はく、「夫れ麇にも忍びず、又且た吾が子に忍びんや。」と。

(『韓非子』)

*1 孟孫Ⅱ人名。 *2 麇Ⅱ子ジカ。

*3 秦西巴をしてⅡ秦西巴に。「秦西巴」は人名。

*4 持ち帰らしむⅡ持ち帰らせた。

*5 歸り至りてⅡ屋敷に歸つてから。 *6 余Ⅱ私は。

*7 逐ふⅡ追放した。 *8 傳Ⅱ養育係。 *9 御Ⅱ御者。

*10 夫れⅡそもそも *11 且たⅡまして。

問一 線部「余 不 忍 而 与 其 母」が書き下し文のように

読めるように、次の□に返り点を書き入れなさい。なお、「而」は「置

き字」といって、訓読する際には読まない文字です。

「余 不 忍 而 与 其 母」

問二 線①「孟孫 大怒」とありますが、なぜ怒ったのですか。

それをまとめた次の文の□ A・Bにあてはまる言葉を、Aは五字以内、Bは十字以内で書きなさい。

A □ が、狩りをして捕らえた子ジカを B □ から。

A

B

問三 線②「復 召 以 爲 其 子 傅」とありますが、この

ような行動をとった理由として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 我が子のために捕らえた子ジカを失ってしまったが、秦西巴が三か月後に見つけて連れ戻すことができたから。

イ 秦西巴を罰したことを御者にたしなめられ、こんなことで優秀な人材を失うわけにはいかないと考え直したから。

ウ 秦西巴の処分を三か月間も考え続けたが、結局、養育係という役職に降格するのが適当であると判断したから。

エ 子ジカを欲しがった自分の母に、処分も恐れず渡すほど親孝行な秦西巴を、我が子の手本にしたいと思ったから。

オ シカにさえ思いやりのある行動をとる秦西巴のことだから、我が子にひどく当たることはないだろうと考えたから。